

信濃美術館の整備にかかる 意見交換会（障がいのある方等）の概要

日 時：令和元年 6 月 14 日（金曜日）午前 10 時 00 分から 12 時 00 分

場 所：長野市障害者福祉センター 体育室（大会議室）

出席者：㈱プランツアソシエイツ 代表取締役 宮崎 浩 氏

信濃美術館 館長 松本 透 氏

長野県 信濃美術館整備室長 日向修一、施設課長 塩入一臣

参加者：35 名

主な意見・要望・質問等（要約）

【全 体】

- 様々な配慮のある、誰もが楽しめる美術館を目指していると聞いて、とても楽しみである。これが一つモデルになって地域に広がっていくとよい。
- お客様のための配慮は十分考えられているようだが、ここで働く障がい者にとっては、働きやすいバリアフリーの職場になっているのか。
→【設計者】物理的な（設計上の）バリアフリーは働く場所も含めて対応している。バリアフリーと言った時、どちらかと言うと、気持ちや運営面のバリアとどう向き合うのかを考える必要がある。
- 意見交換会の主催者にお願いしたい。意見交換会をやることはよいが、今決めなければいけないことと、だいぶ先でもよいことの使い分けをして欲しい。決まってしまったことは意見を出しても反映できない。もっと有益な意見交換会になることを今後期待している。

【設計関連】

<トイレ>

- 障がい者用トイレのベッドの大きさについて、最近は子ども用の折り畳み式のものは設置されているところは多くなってきたが、大人でも使える大きさのものは設置されるのか。
→【設計者】すべての障がい者用トイレに大人用ベッドを設置するのは難しいが、1階と2階のメインの大きなトイレには大人用を設置する計画だ。また、2階の救護室にあるベッドもうまく兼用できればよいと思う。また、その場所へうまく誘導するような案内表示（サイン）も考えていく。
- 「男女こどもトイレ」という名前やLGBTのサインについての考え方を聞きたい。
→【設計者】LGBTのサインは、逆にそれを付けると入りにくいという意見も多い。あ

まりそれを意識せずに、男性のマークと女性のマークと子どものマークをさりげなく入れて、どなたでも使ってください、という名前がよいかと考えている。

- トイレの中で何かが起きた時などの緊急時に、例えば赤いランプが点灯する、など知らせる仕組みはあるか。
 - 【設計者】多機能トイレ（障がい者用トイレ）では、中から通報することができる。廊下でランプとブザーが作動するほか、ブザーは監視室でも聞こえるようになっている。

<授乳室>

- 授乳室は女性だけが使えるのか。男性もミルクをあげるかもしれないが、男性が使ってもよいのか。
 - 【設計者】設計者だけで決めることではないが、悩ましい。男性が入ってくることを女性が嫌がるのではないかと思うし、男性も入りにくいのではないか。女性の方（子育て中のお母さん）の意見を聞いてみたい。

<視覚障がい者用誘導ブロック>

- 誘導ブロックは、車いすや足の不自由な方にも配慮して、（ボツボツの突起がある）一般的な点字ブロックではなく、特殊なブロック（床と材質を変えて誘導するものや、音声で誘導するもの等）をお願いしたい。また、人的サポートもお願いしたい。
 - 【松本館長】やはり設備だけに頼るのは限界があるので、スタッフによる直接的な手助けや情報提供に努めたい。1階と2階、東山魁夷館の受付を中心にして、それぞれの体の不自由に応じたサービスを提供できるように人の体制を整えたい。
- 点字ブロックについて、金沢工業大学の先生が今、点字ブロックをコード化して、それをカメラで読み取り、音声情報を本人に返すという、いわゆるAIを使った仕組みを開発している。3月に塩尻市でデモンストレーションをやったところ、全盲の方から、非常にこれは助かる、という声があった。点状（ドット）のブロックは、そこに何かある、という注意喚起にはなるが、残念ながら何があるかはわからない。まっすぐ進むと何がある、右へ行くと何がある、ということが情報としては何も得られない。それをコード化された点字ブロックを読み取ることによって、サーバーに蓄積されたデータを音声情報として、その本人に返してあげる。そうすると、きめ細かな情報が本人に伝えることができる。是非このシステムを紹介したい。
 - 【設計者】信濃美術館で目指すのは、そういうバリアフリーではないと思っている。スタッフが様々な障がいに寄り添って、直接的な対話や人的サポート体制を充実させることにより、すべての人に優しい美術館を目指していただきたいと思っている。

<エレベーター>

- エレベーターは単純に面積が大きければよいわけではなく、車いすが効率的に乗る形を考えてほしい。面積が広くても、意外と台数が入らない場合がある。
 - 【設計者】例えば病院だと、ストレッチャーが入りやすいように縦長になっている。美術館のように大勢の人が入ってすぐ降りるという場合は横長のほうが使いやすい。今回は緊急時用も考えて、メインのエレベーターはストレッチャーも入る大きさにしているが、面積が許す限り、できるだけ横長のエレベーターを計画している。

<駐車場>

- 駐車場を出るときのゲート（バー）の機械操作は、分かりやすくしてほしい。耳の不自由な人には声で案内するものは聞こえない。
 - 【設計者】美術館の2階（南側）と3階（東側）の身障者用駐車場はゲートなしで入れるようになっている。北側の一番大きな駐車場の管理方法は今後、県とも検討していく。
- 特別支援の子どもたちは路線バスやスクールバスで美術館に行く。スクールバスの大きさも様々であるが、リフト付きのバスになると、どうしても屋根のある場所に停めて、雨が降った時でも大丈夫な場所を乗降場所を選びたい。屋根の高さなども含めて、雨の時でもどんな時でも使える形にしてほしい。
 - 【設計者】大型バスの臨時乗降スペースは3階にあるが、そこには屋根はついていない。しかし、2階の身障者用駐車場の横に、搬入用トラックの駐車場があり、4m以上の高さのある庇（ひさし）がついている。そこは毎日トラックが搬入するわけではないので、美術館とうまく調整できれば、天気の良い日は3階で乗降し、雨の時は2階の搬入用スペースで乗降、というように、うまく使い分けができればよい。
 - 【松本館長】事前に美術館に連絡していただければ、屋根の付いた駐車スペースに入れるよう調整したい。
- 長野県では「信州パーキング・パーミット（障がい者等用駐車場利用証）制度※」ができたが、これは法律ではないので、皆さんが協力してくれないと有効に使えない。人目に付きやすい場所で、障がい者だけが使えることを明確にするとともに、何台かは雨を避けて建物に入れる状況をつくって欲しい。

※公共施設や店舗など様々な施設に設置されている障がい者等用駐車区画を適正にご利用いただくため、障がいのある方や高齢の方、妊産婦の方など歩行が困難な方に、県内共通の「利用証」を県が交付する制度

<その他（照明・サイン等）>

- 講演会やワークショップなどでスクリーンを使うために電気を消して会場を暗くすることがあるが、聴覚障がい者は手話通訳者が見えなくなり大変困る。手話通訳や要約筆記のスクリーンが見えるようなスポット照明にするなど、照明

を工夫してほしい。

→【設計者】地下1階の多目的ホールや1階の交流ゾーン、3階のレセプションルームには、手話通訳のところだけ明るくなるような単独のスポット照明を計画に入れている。

○ 全盲の方以上に弱視の方は多い。高齢の方も増えているし、知的障がいの方もいるので、その方々に配慮した見やすく分かりやすい案内表示（サイン）をお願いしたい。

○ 美術館の通路に、音声ガイドではなく、文字表示のものがあるとよい。

○ 災害が起きた時に、聴覚障がい者には目で見えて分かる情報が必要になる。文字情報など目で見えて分かる情報発信の場所はあるのか。

→【設計者】1階交流スペース横、1階エントランスホール（マルチファンクションウォール内）、2階の東山魁夷館への連絡通路の脇（マルチファンクションウォール内）、東山魁夷館の1階、以上4か所にデジタルサイネージを入れ、文字情報で非常時情報が出るよう計画している。通常（平常時）は美術館の案内が表示されているのが、非常時には災害情報に切り替えるソフトを開発している。

○ バリアフリー新法（正式名称：「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」）があるが、新しい建物がこの法律を遵守しているかどうかは、どの機関がチェックしているのか。

→【設計者】長野市とバリアフリーの話も含めて全てを調整している。

【運営関連】

<触れる美術品>

○ 触れる作品は当初何点くらいご用意されるのか。

→【松本館長】現在候補に挙がっている作家は4人。1回だけのプロジェクトではなく、ずっと継続していきたいと考えている。

【日向信濃美術館整備室長】「タッチアートギャラリー（仮称）」に展示する作品の制作をお願いしているが、お一人の作家がどのようなものを制作するかによっても作品数は変わってくる。また、それを定期的に展示替えしていきたい。

○ 信濃美術館には既存の立体作品も多く所蔵されているが、今までは触れることはできなかったが、今後は触れることができるのか。

→【松本館長】所蔵作品の中には、例えばブロンズ（青銅）でも表面処理によって、また石でも、触ると手の油が付いてしまうともう1度削り出さないといけない種類の石もある。彫刻の修復の専門家とも相談して、触れても作品に支障がない既存の作品は、触れる美術品としてこれから作家に制作を依頼するものと同等に同じ場所で展示したい。

<プログラム等の企画>

- 鑑賞プログラムは、障がい者やサポート団体が実際に間に入ってアーティストや美術館の学芸員と一緒に作ってほしい。美術館のインリーチをつくる仕組みに障がい者やサポート団体が参画できるよう検討してほしい。
- 以前、国立民族学博物館に行ったが、そこでは実際に障がい者が働いていて、常に意見を出しながらユニバーサルな美術館を目指している。障がい者の参画があってこそ、ユニバーサルな状態が維持できると感じた。大変重要なことだと思う。
- ある美術館では、障がい者のための様々な配慮があり、展示物を触れることもできたが、別館で特別展があり、楽しみにして行ってみたら、点字のパンフレットもなく、入口も階段で、まったく障がい者を拒否しているかのように感じた。特別展など、ほかの人も皆が観たい展覧会は障がい者も観たい、触りたい、少しでも知りたいと思う。だから、その都度、どうしたらいろんな立場の人でも一緒に楽しめるか、ということを考えて企画してほしい。障がいのある当事者が参画して常に活躍している状況があって初めて、どこを観ても、いろんな人が楽しめる美術館になるのではないか。
- 盲ろう者のための企画をつくってほしい。

<鑑賞>

- 信濃美術館は善光寺に隣接しているので観光客もたくさん訪れると思うが、障がいのある方の中には団体客に対して抵抗を感じる人もいる。団体客と個別二丁の鑑賞動線について、設計段階で何か配慮されているか。
 - 【設計者】動線は分かれな方がよいと思っている。海外の美術館（ルーブル美術館など）では、展示室の中で子どもがワークショップをやっている脇を観光客や地元の方が通っている。美術館で子どもが話しているのが絵の鑑賞にNGだ、というふう感じていない。誰かが話したらうるさい、とか、そういうこと自体がなくなる美術館になればよいと思っている。
- 大勢の人の中で鑑賞するのに抵抗がある障がい者もいる。閉館後に個別に少人数で鑑賞できたり、その鑑賞を当事者団体の方にサポートしてもらうなどの配慮もあるとよい。
- 美術館が解説するときに、音声ガイドではなく、聴覚障がい者にも分かるような案内システムがあるとよい。
- イベント開催時には手話通訳をつけてもらえるか。
 - 【松本館長】大中小のプログラムすべてにご用意できるかどうか、プログラムの数にもよるが、できるだけ対応したい。

<その他>

- 筆談ボードや iPad、VD トークのような音声をタブレットに文字で表示するソフトが受付に準備されているとよい。
 - 【松本館長】機器を導入して使うべき場面と、スタッフによる人的支援、という両方の兼ね合いだと思う。機器はどんどん進歩していくので、常にそれを追いかけていくのも限界がある。絵を描きながらでも会話ができるので、タブレット形式の機器がなくても、紙と鉛筆があれば対話ができる。

【その他（城山公園・バス停）】

- 信濃美術館は城山公園の中にあるが、美術館の敷地である公園やそれに接する部分についても、同じようにバリアフリー新法の遵守をお願いしたい。
 - 【設計者】私は公園の直接の設計者ではないが、（城山公園を整備している）長野市の公園の図面を確認し、意見も言いながら進めている。
- バス停について、バリアフリー新法の省令（ガイドライン）の中には、バスが走る道路と歩道との段差は 15 cmを標準にするという規定がある。また、バス停の構造として、今までは歩道に台形の切り込みを入れる形状（バスベイ型）が主流だったが、この形状では停留所にぴったりと停車するのが非常に難しいということで、国では、台形型から L 型（新型バスベイ）を推奨している。この形状だと容易に停留所にぴったり停車ができる。この 2 点に配慮したバス停に整備することで、車いす利用者でも一人で美術館に来ることができるようになるので、是非やってほしい。
 - 【設計者】長野市と打ち合わせをしており、待合プラザのバス停留所の切り込みのところは台形型ではなくて L 型の切り込みで計画している。ただし、公園の設計最終案のとりまとめには、もう少し時間がかかると聞いている。

(以上)